

おまえを むかえに いくよ

綾乃

その姉妹はうつくしい双子だった。かんばせに背格好、指の先まで、よく似ていたが、気性は対照的で、緑葉は荒いそれをしていた。妹の青葉は穏やかで、何かに怯えていないことの方が多かった。

青葉は緑葉に、毎日のように、行き過ぎとも言えるからかいを受けていたが、二人の間には誰にも割って入れない信頼関係があった。

緑葉が左と言えば青葉も左と言ひ、右と言えば右と言ひ、青葉が泣けば緑葉は謝り、怒れば怒った。

意地の悪い姉ではあったが、その双子の親戚に、この上とも意地の悪い叔母がいた。叔母は凡庸な顔立ちの娘を持っており、うつくしい双子を妬んでいた。叔母自身も十人並みの風貌であることも妬みの謂れだったのだろう。

「緑葉ちゃんと青葉ちゃんは、性格の悪さが顔に出ているわね」

それを聞いた誰もが内心呟いたことを、緑葉はあっさりと言ひ放った。

「おばちゃんは極悪人なのね」

齡十にならない子供に言われ、女は顔を醜く歪ませた。娘とよく似たその顔は、緑葉に殺意さえ覚えているようだった。

緑葉はけろりとしていたが、青葉はまた、怯えて、涙を堪えていた。

姉妹はその後、父親に揃って叱られたが、何もしていない青葉も黙って正座をしていた。そのことは青葉も緑葉も、両親もそれが当たり前で、緑葉だけ叱るなどとは誰も考えなかった。

二人は、二人でひとつであった。

ある夏の日、双子は揃いのワンピースに麦わら帽子を被って、祖父母の家を訪ねた。夏休みの間の二週間、そこで過ごすことになっていた。

「緑葉、来るとき、きれいな森があったよ」

「わたしも見た。石のお家みたいな、あったの、わかった？」

荷物を与えられた部屋に置きながら話していると、祖母が襖を開けた。

「緑葉、青葉、あの森に行くなら失礼の無いようにするんだよ」

それだけ言って、ああ、鍋が、と呟きながら台所へ戻っていく。二人は顔を見合わせた。

「失礼って、なに？」

「失礼って、なにに？」

鏡合わせのように首を傾げ合い、「失礼の無いように遊びにいこう」と緑葉が何度も頷いた。

その日は祖母と夕食を作り、風呂で遊んで、上がると直ぐ布団に倒れこんだ。電車での旅と逆上せたことで、すぐに眠ってしまった。

「青葉、起きな、遊びに行くよ！」

翌朝青葉は、緑葉に布団を剥がされ、眼を擦りながら上体を起こした。見慣れない部屋に一瞬戸惑うが、緑葉がそこに居ることで安心し、次の瞬間には、そこが祖父母の家であることに気付いた。はっと眠気が去り、笑顔で立ち上がる。

「おばあちゃん、おはよう」

「緑葉、青葉、おはよう、布団は畳んだの？」

今まで布団を畳んだことの無かった二人は、緑葉は文句を言いつつ、青葉は慌てて試行錯誤しながらそれを行った。

身支度をして朝食を摂り、祖父母とテレビを見ていると、玄関の方から声がした。

「こんにちは！」

ドアホンがあるのに、と青葉が思っていると、祖母は緑葉と青葉に付いてくるよう言って立ち上がった。ばたばたと後を追う。

「おばあちゃん、おはよう」

玄関に立っていたのは、双子と年の変わらないように見える少女だった。髪が短く、日に焼けていて、青葉は、スカートを履いていなければ男の子だと思ったろうな、と少女を観察した。

緑葉はというと、玄関とはいえ人の家に朝から勝手に入り込んだ少女を快く思えなかった。

「おはよう、すみれちゃん。緑葉、青葉、挨拶しなさい」

祖母によると、そのすみれと言う少女は、近所に住む双子と同年の子供らしかった。緑葉は鋭い目のまま挨拶し、青葉ははにかみながら名乗った。

「二人とも、すみれちゃんにこの辺を案内してもらいなさい」

双子は靴を履き、すみれと共に広い庭を抜け、門を出た。

「すみれ、って言うの」

緑葉は意地悪く、

「似合わない名前」

「よく言われる」

すみれは気にする様子もない。

「この先に蛍がいる水場があるんだ」

「蛍？」

青葉が食いつく。都会で育った青葉には、蛍は小説や漫画の中の生き物だった。緑葉にももちろんそうで、少し興味を持つ。

「蛍なんて夜にならないとただの虫じゃない」

「場所を教えてあげるから、夜に来たらいいんだよ」

三人は昼食の時間も忘れて遊び、すみれが唐突に空腹を呟いたことをきっかけに、家へ戻った。

「青葉、道覚えた？」

「あんまり」

「グズ」

緑葉は鼻で笑い、青葉は申し訳なさそうに俯いた。

「すみれちゃんとは仲良くできたの？」

祖母に聞かれ、緑葉は頷く。

「青葉、明日、森に行こう」

食器を洗う祖母に聞こえないよう、緑葉が囁いた。

翌朝、元気よく二人は家を出て、長いみつあみを揺らしながら走った。汗が流れ落ちるほどに駆け、青葉が音を上げそうになったとき、一層蒼い木々が二人の目に飛び込んできた。

わあ、と声をあげる。緑葉はそのまま森へ駆け込み、少し遅れて青葉も追う。

「緑葉、どこ？」

広い森で姉の姿を探す。

「こっち、青葉」

緑葉は石で出来た祠のような物の傍に立っていた。

「これ、なに？」

「わかんない。おばあちゃんに聞こう」

二人は森中を探索し、青葉が立ちくらみを起こして少し休憩した後に祖父母の家へ帰還した。

「森の中に、なんか、石を積んだみたいなものがあったけど、あれはなに？」

昼食のそうめんを啜りつつ、緑葉が祖母に聞く。

口数の少ない祖父が、

「あれはあやかしの家だよ」

「あやかし、ってなに？」

祖母が続きを引き取る。

「妖怪、怪異、お化けのことだね」

「えっ、お化け？ 幽霊とか？こわい」

「お邪魔したんなら、明日、お供えを持って行きなさい」

庭になっていた夏蜜柑を一つ、青葉が手に、双子は再び森へ向かった。祠はすぐ見付き、その前にしゃがんで、石の隙間に夏蜜柑を置く。

「お邪魔しました」

青葉が神社でするように手を合わせる。

「青葉、妖怪なんだから手は合わせなくていいんだよ」

「そっか」

あやかしに関わる、その体験は少し危うくて心を惹かれるものだった。その次の日も、また次の日も、二人はそこへ通り、庭から野菜や、果物をこっそりと採っては供えた。

ある日、緑葉はいつものように野菜を手に祠の前に立って気付いた。

「青葉、おかしいよ」

「え？」

「わたしたち、毎日お供えしてるのに、何も残ってない」

昨日供えた茄子も、その前の胡瓜も、その場にはなく、ただ、石だけが佇んでいる。ようやく気付いたのだった。

「誰か盗んでるのかも」

「えっ……。ばちが当たるよ。もしかしたら妖怪が食べたのかも」

「だからあ、妖怪なんていないってば！」

緑葉は妖怪を信じていなかったが、何となく感じるものがあり、物を供えるのを楽しんでいた。

「なに、わたしたち毎日他人に物をあげてたの？ むかつく」

「緑葉……」

「むかつく！」

「緑葉、駄目だよ！」

緑葉はがっ、と祠を蹴り、ごろり、と石が一つ落ちたが、構わず蹴ろうとする。青葉はそこへ割って入って、背中を祠の石に強打した。

「いたっ……」

「何してんの、馬鹿！」

「蹴ったら、駄目だよ」

緑葉は半ば背負うように青葉を支え、森を出た。祖母は二人を見て血相を変えたが、緑葉が、ちょっと転んだだけ、と誤魔化した。

その夜、二人で風呂に入っていると、背中を向けた青葉のそこに、小さな痣が出来ているのを、緑葉は見つけた。申し訳なくなったが、目を逸らす。

二つ目の異変に気付いたのは、三日後だった。

この家に来て、六日目、あと八日で自宅に帰るという時だった。

祠には行かなくなり、毎日一緒に風呂に入っていた二人は、青葉は痣があることすら知らず、緑

葉はそれから目を背けていたのだが、その日、ふと、青葉の背中を見ると、痣が異様な変化をしていた。

「なにこれ……？」

緑葉は思わず呟き、青葉が振り返る。

「なに？」

青葉の背中の痣は、横に細く広がっていた。帯状ではなく、断続的に、……まるで、暗号か、…
…文字のように。

緑葉は青葉を鏡に背を向けて立たせ、自分の背中が見えるようにした。シャワーをかけて曇りを払うと、青葉はあっと息をのんだ。

「どうして……？ ぶつけたのはこんなに広くじゃないのに」

青葉はただ不思議そうにしていたが、緑葉は怯えていた。これは、呪いかもしれない。

緑葉はそれから毎日青葉の背中を見た。当人には言えなかったが、それは段々と、文字にしか見えぬ形へと変わっていった。

……それが読めるようになった、帰宅前日の夜。

緑葉は青葉にそれを告げた。

「青葉の背中に、……文字が、ある」

「文字……？」

青葉は鏡を振り返り、凍ったように固まった。

あした おまえを むかえに いくよ

呪いの宣告、だった。

二人は泣きながら風呂から上がり、裸のまま祖母にしがみついた。最初は垂れた水滴や行儀の悪さを叱ろうとした祖母も、双子の怯えた顔を見て只事ではないと感じとり、二人の話を聞いた。

青葉の背中の中の文字を見て、顔を真っ青にした。

「青葉、これはどうして？ 何をしたの」

「森の、」

青葉はぐずぐずと泣きながら、

「石のお家に、ぶつかって、」

緑葉が続ける。

「ぶつけてから少しづつ大きくなって、段々、文字みたいになって」

「……お払いをしなくては」

祖父は何も言わず家を飛び出し、すぐに人を連れてきた。十代後半に見える、うつくしい少女だった。

「花代さん、この子が」

花代と呼ばれた少女は、青葉の背中に触れ、弾けたように手を離すと緑葉を見た。

詳しく話をすると、花代は青葉の背中を撫でたり叩いたりして、呪いを浄化し始めた、ようであった。青葉にも緑葉にも解らない言葉を呟く。

「大丈夫、青葉ちゃんは」

「本当か、花代さん」

「……緑葉ちゃんも、祓おう」

緑葉は怯えて逃げ出した。居間から駆けて、双子に与えられた部屋へ閉じ籠る。

「緑葉ちゃん！」

「いや！ いや！」

「祓わないと……！」

緑葉は布団に潜り込み、出ようとしなない。

「緑葉ちゃん！」

無理矢理緑葉を引っ張り出し、花代は祓い始める。

「これが終わったら、祠を直して、お供えをしよう、そうすれば連れていかれないから」

「祠には行きたくない！ 怖い、嫌！ 連れていかれるのは青葉なのに、わたしまで連れていかれる！」

「連れていかれないように、謝りにいくんだ！」

「嫌！ 嫌！」

駄々をこねる緑葉に服を着せ、部屋から引きずるように出す。

「青葉、」

青葉は居間で苦しそうな表情で眠っていた。それを尻目に花代は緑葉を連れて家を出る。

「どうして？ 連れていかれるのは青葉でしょ！」

「祠を壊したのは緑葉でしょう」

「でも」

「十一時、五十分……間に合わない、早く」

花代は時計を見て呟くと、足を早めるが、緑葉は頑としてその場に留まろうとする。

十一時五十八分。

ようやく森へついた頃、風に揺られざわざわと木の葉が鳴った。昼間はあんなにうつくしい木々も、今の緑葉には、あやかしの掌にしか見えなかった。

「おまえをむかえにきたよ」

ざらざらとした、禍々しい、逆撫でするような声が、後ろから、した。

緑葉は振り向けなかった。花代は急いで進む。

「ねえ、来てる、後ろに、いる」

「解ってる」

「嫌だ、行きたくない」

祠へ行きたくないのか、あやかに連れていかれたくないのか、それを何度も繰り返す。

「嫌だ、嫌だ、青葉、」

「早く、緑葉！」

カチリ、と花代の腕時計の針が動いた。

24時。

今まで緑葉を引っ張っていた花代から力が抜け、その場にへたりこむ。その目は固く閉じられ、呼吸も荒い。

「どうして……」

「むかえにきたよ」

緑葉は振り返り、誰もいない、安心して、花代の方を向いた。

目の前に、ぽっかりと口を開けた、その口しか見えない、黒い、人間の形をした影がいた。

「嫌、」

叫びは、その影に掻き抱かれた瞬間、緑葉のその小さな体ごと、闇に消え去った。

花代は青葉とその祖父母に、頭を下げた。

「どうして、私じゃなくて、緑葉が連れていかれたの」

青葉は泣きながら喚いた。

「本当に、ごめん。わたしがもう少し早く、緑葉ちゃんを連れていけたら」

「緑葉……緑葉」

「……文字の痣は、青葉ちゃんの背中にあったろう？」

今はもう真っ白くアザも消えた背中を見て、花代は呟く。

「おまえをむかえにいく。それが何故背中にあったか」

「背中をぶつけたからじゃないのか？」

祖父が応える。

「否、背中、というのは普通、自分では見られない。背中を見るのは親しい、一緒に風呂へ入る、双子の姉、緑葉ちゃんだ。おまえ、というのは、緑葉ちゃんだった。祠を壊したのは青葉ちゃんだが、その原因は緑葉ちゃんだったのだろうか？」

「緑葉は、帰ってくるの？」

未だ服も着ず泣いている青葉に、祖母が毛布をかけた。

「……帰っては来ないよ。今頃は、同じあやかしになっていることだろう」

おじいちゃん、おばあちゃん、お久しぶりです。青葉です。

わたしも、十七歳になりました。

十歳の頃、緑葉とおうちにお邪魔して以来、ご無沙汰していましたね。

わたしの回りの皆は、緑葉のことを忘れよう、忘れよう、としていた皆は、ほんとうに忘れてしまいました。お母さんとお父さんは、まだ、毎日仏壇に手を合わせています。

もちろん、おじいちゃん、おばあちゃんのお墓にもお参りしていたようですね。

わたしは今日、初めて二人のお墓に来ました。昔は怖かったお墓も、今ではなんだか落ち着くのです。

でも。

時折、見かけるのです、あの姿を。そう、見たこともない、花代さんから聞いただけの、黒い姿

口をぽっかり開いた黒い影。

あれはきっと、緑葉なのだと思うのです。

背中を見るのが、とても怖いのです。振り返らないし、人にも見せたくない。

十歳だった緑葉の拙い文字で、

おまえをむかえにいくよ、

そう書かれてはいないかと、恐ろしいのです。

身内の霊ならば喜んで会いたい、そう思う人もいるでしょう。

でもあのあやかしは、人ではありませんから。

緑葉といえど、あやかしであって、わたしの姉といえど、あやかしであって。

花代さんが祠を直してくれてから、心配していなかったのですが、いま、とうとう、左手に赤黒いアザを発見してしまいました。

そう、背中ではわたしには見られないから。

わたしを、むかえに、くる。

黒い影となった緑葉が。だって、あの子は人の不幸を楽しんでいたもの。わたしの死をも願っているはずだもの。

否、死ぬより苦しい、あやかしとしての生活を送っているのでしょう。そして、そこに、わたしも引きずり込みたいのでしょう。

わたしがあやかしになる前に、緑葉の祠、お家を作ってあげようと思います。

大嫌いで大好きだった緑葉。

もうすぐ、楽にしてあげるからね。